

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十四年五月一日発行（毎月一回一日発行）
第十九巻一号（通巻第二二七号）

鈴



ぐるっけ

創刊 18 周年

第 217 号

5. 2012

俳句雑誌

GLOCKE

花塘

品川 鈴子

優先座席^{シート}に 芦屋、武庫、淀の花

桜茶に 摘む枝垂花介護士と

余震ある度に 濃くなる紅枝垂

桜茶は こぼれし 吾の涙味



崖崩るとも目じるしの花櫓

内輪より崩壊兆す花塘つみ

鎧戸を閉めて減らせり花の日々

九条葱添へ兜煮の出来上がる

津波裂け一人静の岩根締

空咳をして応いへなき文学館



玉鈴

吟

大阪 中田寿子

留守番の母は炬燵でまた仮寝
山里の命がけなる雪下し
チヨコレート売場広げて二月来る
冴え返る進学塾の立看板
うみやまの恵み豊かに木の芽和え

神奈川 永塚 尚代

日向ぼこ幼に訛なおされる
子育ての助っ人祖母の二月かな
枯葎この奥に姫眠るかも
夜の間には海は凧ぎけり紅椿
春寒し何度ものぞく植木鉢

大阪 野口喜久子

大寒の指揉み解すピアニスト
臘梅の夕陽離さず透し見る
雪女自動改札素通りす
太郎冠者余寒の板を踏みにけり
傘すぼめ手に確かめる春の雨

兵庫 蓮尾みどり

ダルビッシュ張りのフォームで年の豆
名にし負う酒に潰れた鬼溜り
竜天に登る夫婦の当り年
種銭を仕込み今日より春財布
軽んじられる国旗国歌や建国日

兵庫 長谷川 鮎

補陀落の寺領莢豌豆実入り
藪茗荷僧の薬か補陀落寺
藪茗荷大門坂は三丁目
五丁目は杉に洞あり忍冬
花檣潮岬の分かれ道

兵庫 林 哲夫

広縁は兎らの遊び場寒雀
夕曇友の家まだ見付からず
右手は鞆弓手で習ふ左文字
風邪籠り自髪頭に惱みごと
卒園の児にも宿題おみやげに

兵庫 林 美智

どんど焼駈けつける子を追ふプードル
逆上り出来ぬと励む子にも春
他人の手のやうな吾が手に春の来る
春遅々とリハビリ室にさすひかり
ギブス解け大手を振つて春迎ふ

愛媛 福島 松子

冬日和フェルメールの碧復元す
飼い主をじつと見ているかじけ猫
霜焼の小指まで似る姉妹
懐手して小走りの商店街
貸出しの膝掛け鮮やかカフェテラス

愛媛 福田かよ子

凍空の蒼きを裂き^{こわいろ}て飛行雲
炉話の婆の^{こわいろ}声^{こわいろ}燻れり
鳥声なき緑化センター余寒なほ
トロンボーン伸びぎり春陽はね返す
春浅し八角時計ゆるり鳴る

兵庫 藤井久仁子

凍の朝嬰抱くやうに牛乳瓶
初暦なき張り壁の白さかな
凍空へ割れた蛇口の水も噴き
雪煙赤のリユックの見え隠れ
朝日射す巖の足の悴める

兵庫 藤田かもめ

偕老のふくら雀に目を細め
御神渡り報ずラジオの嘎れて
六甲の裏山住ひ若菜摘む
料峭の裸婦のデッサン抄らず
鱧皮のハンドバッグや雛の客

兵庫 史あかり

噓して言ひたき言葉忘れけり
教はるも教へるも佳し寒稽古
出石そば雪解雫の軒くぐり
手ほどきのカード麻雀蟹の宿
死火山に足踏み入れて若菜摘

兵庫 古井公代

立春の市章浮きたつマンホール
春浅き独身寮に魚焼く香
深々と畑のポンプに藁頭巾
啓蟄の底よりしぼるマヨネーズ
待春の少し崩れし門の塩

大阪 古林田鶴子

年の豆両の掌あふれけり
初水踏み確めつ通学児
裏側は牙をむく雪いやうまし
カカオ豆の由来新たにバレンタインデー
日脚のびあともう一問とクイズ解く

香川 細川知子

一徹の夫にかしづき炭を継ぐ
鏡割礫を齧るかに固き
フラフープ重ね着二枚脱ぎ棄てて
初写真子に老けたねと云はれをり
春隣天へ地へ抜き刺繡糸

兵庫 細野恵久

松柏に色かさねたり藤の花
泥を食ふ二羽の燕のやゝ離れ
走り梅雨監視カメヲを傘で過ぐ
目高たちみな先頭に出たがらず
金柑の花に茶店の名残見つ

愛媛 松井洋子

姿見に日差しの移る立子の忌
白杖のふと立ち止る薔薇の前
蠅虎喜怒哀楽を演じをり
今世紀の風にも慣れし古代蓮
教会に鋭角多し狐狸庵忌

埼玉 松木清川

冴え返る鋼の酒蔵林立す
大雪は里一村を呑み込めり
雪晴れや稜線確と八海山
潦溶けて又張る薄氷
絵馬結ぶ鎮守の梅の綻びぬ

愛媛 松本恒子

楯明り後ろの墨絵一段と
先頭が踏めば皆踏む薄氷
渡し守頬被りして公務員
今までは源氏鼻肩よ春寒し
大受験電波時計の狂ひなき

愛媛 三浦澄江

管制官空を拝みて初仕事
寒の鯉もぐりもぐりて泥まみれ
寒餅を水に眠らす一人もの
年重ね下山は早し雪の道
本堂のすべてが冷えて燭もなし

兵庫 三枝邦光

老幹の生氣かよはず臥竜梅
京野菜濯ぐせせらぎ春立ちぬ
漣の光ひろげて白魚しろお舟
春立つや耳より大きいヤリング
荅ほど恋の予感の梅日和

兵庫 水野範子

就職は念願の巫女神楽笛
梅に来てふと田心ひ出すガスの栓
寒稽古午餐に啜るカップメン
雪の夜馬刺所望の学生等
公園の春水溢る陶河馬口

兵庫 水野 弘

阿蘇の山八重山吹に染められて
雪被る平家を偲ぶ厳島
冬夕焼けカラス一羽まつしぐら
記念樹に辛夷残してシルバー去る
「冷えますね」頬被りして朝散歩

香川 三橋 早苗

呼気のたび眼鏡くもらすマスクかけ
襟巻を片手で押さへ杖をつく
痛む足ひねもす過ごす置炬燵
首縮め丸まる猫に貸す蒲団
花屋だけあざやかに咲き雪催ひ

茨城 三輪 慶子

風光る古代調布の里帰り
恋猫の吾を無視して過ぎるなり
春の雪雀は足をすべらしぬ
荒川と隅田川なり風光る
この隅の放射能濃し冴返る

埼玉 向江 醇子

五感足す第六感で春を詠む
春めくや家族の朝の気配にも
バトンの子衣裳短かく春を待つ
春の宵耳全開に琴を聴く
春なれば鳴らさぬ鈴を振りてみよ

兵庫 村田とくみ

温め酒大の男のうら表
一徹に生きて寝酒の好好爺
買溜めの年玉袋出番なし
初買物あちこち歯ぬけ青果台
新年の先達はわれ犬散歩

大阪 師岡 洋子

雪の降る街を空中廊下より
天と地のわからぬ色紙西行忌
片耳にくるお逮夜の隙間風
柳に芽街頭署名に歩をとどむ
冴返る母の遺せしベツド跡

東京 安田とし子

春光や遺愛の書架にうす挨
ふるさとは長寿の多し桃の花
水温む舳先そろへし舫ひ舟
梅八分明けは音なき雨となり
思ひなし花の蕾の膨らめる

兵庫 山口 庸子

突風に枯葉連れだちダンスする
人は古い家財も古りて日脚伸ぶ
夕闇は物みな包み虎落笛
ドカ雪に日本海側白無垢に
真夜中の車の軋み冴え返る

鈴の奏

品川鈴子選

さまざまの忸怩たるもの喜寿の春
返信は無用とありし梅便り
兵庫 吉田 耕人

冬浪に占め尽されて明石の門
籬の間の隅に転がるゴルフ球
御食国若狭路狭く雪深し
福井 木曾 鈴子

鋭き刃吾に向へり軒氷柱
除雪して句作り半ば眠気来る
度度の大雪予報身に徹ふ
わが姿テレビに見たり女正月
兵庫 高木 篤子

笑むごとく妣の匂ひも枇杷の花
胎動を手で受けとめて春の声
桜の芽一回生の制作展
寒風に會長変はる噂舞ひ
兵庫 中井 光子

一瞬に雪化粧せし六甲山
東京マラソンの話題は二位の人
春浅き眼科待合人あふる
節分に齡ごまかす豆の数
兵庫 坊野貴代美

鬼は外福は何処だと子が尋ね

鬼やらひ泣く児に飴のねりじ棒
春火鉢灰をならしつ恩師待つ
愛媛 濱田ヒチエ

軟らかき鬼の豆まく老の家
風強し節分飾り飛ばされる
植木鉢形さまざまに雪の嵩
脇締めて写真数枚雪の庭
兵庫 長谷川としゑ

にじり寄り柵をつかみて春遠し
腰痛の我が誕生日浅き春
春寒し寝るも起きるも痛き腰
ベッドより遺影見上ぐる春陽ざし
凍て月の照らす母屋に母臥せり
愛媛 沖 則文

シベリヤの木樵の父の雪帽子
水涸れて集まる鯉の背鰭垂る
吹雪くなか妻救急車誘導す
梅日和かち屋の里の村おこし
兵庫 市橋 香

盆梅の固きふくらみ紅きぎす
音もなくカーテンよぎる春の雪
木の芽時身をいたはれと祖母の声

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評
四句〜十五句 木村 美猫 //

*選句は全て 品川鈴子

雛の間の隅に転がるゴルフ球

吉田 耕人

わが姿テレビに見たり女正月

高木 篤子

雛の間といえは赤い毛氈で華やぐ部屋。その規模は様々だが、何れも娘の幸先が良いように願う親心や、健やかに育つ可憐な命など、最も幸せな境涯の一場面だろう。

ゴルフ好きの元氣なパパとの日々に、ささやかな幸せを感じていたなら、願い通りの一姫まで授かり、いつもの居間を片付けて、初雛の舞台に早替わりと察しられる。緋毛氈の襷にちらと覗く白い硬球は、健全な家族のめでたさを語る。

鋭き刃吾に向へり軒氷柱

木曾 鈴子

寒風に会長変わる噂舞ひ

中井 光子

北国に冬将軍が居座る頃、明け暮れを軒の氷柱に囲まれて家に閉じ籠められる。猛威を振るう風向きのまま傾いて、

長い氷柱は鋭い刃となり自分に立ち向かう。大自然への畏敬の念が粘り強い風土性を培う。

寒風が吹き荒れ、春の到来をただひたすらに待つ頃、今年度で会長が変わるらしいという噂が聞こえてきた。順当な役員交代ではなく不穏な動きがあるらしく、何だか不安な気持ちになり一層寒さが身に沁みる。

どんなに小さなグループでも人が集まると何かときぎくしゃくすることもあるが、できるだけ穏やかに平和に春を迎えたいものだが。

鬼は外福は何処だと子が尋ね

坊野貴代美

節分の夜、子どもたちが鬼の面をつけたパパに向けて「鬼は外」と勢よく豆をぶつけると、初めは豆を跳ね返していたパパ鬼もついには「参った参った」と降参して逃げて行き、子どもたちは大興奮。「福は内」と家の中にも豆を撒くのだが、ふと、いったい何に豆を投げているのかと子どもは思う。福って何なのかしら？何処にあるの？

幸せは目には見えないものだけど、確かにそこに、家の中にあるのですよ。

軟らかき鬼の豆まく老の家

濱田ヒチエ

若い頃には、節分の豆は歳の数を、健康な歯でぼりぼりと音立てて食べていたものだが、高齢になると食べなくてはいけない豆の数は増えていくし、歯は弱つて入れ歯になったので、できるだけ軟らかい豆を用意する。これで食べやすくはなったものの、こんなに軟らかい豆を投げたら、鬼はへっちゃらで逃げてくれないかも知れない。

ベッドより遺影見上ぐる春陽さし

長谷川としゑ

氣候のよい季節になってきたが、体調が今ひとつすぐれずベッドに横たわったまま、もう昼過ぎなのか窓から暖か

な春の陽ざしが差し込んでくる。ふと見上げると先に逝ってしまった人の遺影に私を見守る優しい服差しがあった。励まされているような気がして、少し力が湧いてきた。頑張つてそろそろベッドから出てみましょう。

凍て月の照らす母屋に母臥せり

沖 則文

臥せっている母が気になり寝付けない冬の夜。もうずいぶん高齢なので、ある程度の覚悟はできていないといけないのだが、母との永久の別れをそう簡単には受け入れることはできない。少しでも長くそばにいてほしいと切実に思う。冴えきつた月の光は神々しく、母の眠る家屋を明るく照らし、母の人生を讃えてくれているようだ。

盆梅の固きふくらみ紅きざす

市橋 香

盆栽は日本特有の園芸技法で、永年のきめ細やかな手入れによつて小鉢に大自然の風情を表し、殊に盆栽の梅は高度な技術で枝ぶりを整え、毎年美しい花を咲かせて屋内に春の訪れを感じさせてくれる。

暦ではもう春とはいえなかなか暖かくならず、盆梅の蕾は固いままだが、ほんの少し赤らんできたので、春がもうそこまで来ていることを感じさせる。(以下略)